

Title	報告2. 民国初年における労働尊重観念の形成 (シンポジウム「日本文化と東アジア」(1985-1986))
Author(s)	狭間, 直樹
Citation	日本文化研究所研究報告 (1988), 特別号: 449-457
Issue Date	1988-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/122358">http://hdl.handle.net/2433/122358</a>
Right	東北大学東北アジア研究センター
Type	Research Paper
Textversion	publisher

# 日本文化研究所研究報告

1988年3月

## シンポジウム「日本文化と東アジア」

(1985—1986)

東 北 大 学  
日 本 文 化 研 究 施 設

### 報告2. 民国初年における労働尊重観念の形成

狭 間 直 樹

#### I

本報告はこの分科会のテーマに正面から取りくんだものでないことを、まずお断わりせねばならない。ただ、民国初年すなわち1910年代の中国が新文化運動の激動の時期であったこと、その運動においては、〈徳先生〉（徳謨クラ西 democracy）と〈賽先生〉（賽因斯science）を中国の地に根づかせることがそのもっとも重要な眼目と看なされたことを考えるなら、その時代思潮の一端を剖析することにより、本報告も〈伝統と科学〉なるテーマにたいしいささかの意味を持ちうるのではないかと思う。

#### II

中国史上、労働を尊重すべきものとして讃えた有名な画期的演説に、北京大学校長蔡元培の〈劳工神聖〉演説<sup>①</sup>がある。1918年11月16日、北京の天安門前で開かれた協商国の勝利を祝賀する講演会での演説である。

この耳なれぬ題目を冠せられた蔡元培の演説の内容は、残された記録によればこうである。すなわち、世界大戦で協商国側が勝ったために「光明の主義」（互助・正義・平民主義のこと——前日、同じ場所で蔡はこれについて演説）を発展させる条件ができた。これからの世界は「劳工の世界」である、という。そして、

わたしの言う劳工とは、たんに鍛冶・大工等々とどまるのではなく、体力であれ知力であれ、およそ自分の労力をもちいて他人に有益なしごとをするものは、すべて劳工である。ゆえに農民は栽培の工、商人は運搬の工、学校職員や著述家・発明家は教育の工であって、われわれはみな劳工なのである。われわれは劳工の価値をみずから認識せねばならない。劳工は神聖である！

と述べ、さらに、まともな仕事をせずに奢侈の生活をするものを羨む必要のないことにふれ、再度、「劳工は神聖である！」と高らかにうたって演説をむすんだのであった。

この演説が中国の未来を「劳工」の世界の確立のなかに見ようとしていたことに疑問の余地はない。ロシア革命がたえられ、大戦勝利が公理・人道の勝利ととらえられた精神的高揚のなかで、そのような未来像が描かれるのはほとんど必然的なことでさえあった。現におなじく北京大学の主催する中山公園での戦勝祝賀講演会での李大釗が〈庶民の勝利〉<sup>②</sup>を演説したのはこの

二週間ばかり後のことだったのである。

もうすこし先へ進むなら、半年あまりののち国民党の機関紙<sup>③</sup>にも、あらゆる文明生活のもとには勞工の生産なのだから「勞工は貴とばれるべきである」といった文章がのせられている。さらに一年後の同紙には、「勞工神聖！勞工神聖！勞工の隊列に参加せよ！勞工の隊列に参加せよ！」との呼びかけが雑誌新聞ににぎやかに踊っていること、その理念を実現するには実際に行動を起こさねばならぬこと、を述べる文章まで載せられている。

1920年ともなると中国共産党結成へのうごきが起こるが、そこでは当然ながら「勞工神聖」はほとんどアプロオリの前提であった。上海の準備小組が刊行した《労働界》<sup>④</sup>創刊号の〈発刊詞〉にあたる陳独秀の文章では、労働がかくも重要だから、「ゆえにある人が“勞工神聖”とかいったのだ、’と前置きして、それにたいして“勞工神聖”なのはどうしてはたらくものが‘下等社会’で、はたらかぬものが‘上等社会’なのかとの労働者の反論を設定し、説明をくわえるのである。もちろん、それが社会思潮として定着しはじめているという面もみられたのであって、たとえば南昌からの報告では、かつてなんの動きもなかったこの田舎都市も、「勞工神聖」の新思潮のあおりをうけてなんと労働組合（工会）の誕生をみた、といっている。要するに、蔡元培の提起したこのひびきのよいスローガンは、国民革命にむけて胎動しつつあった中国の社会にうけいられ、それをつきうごかす役割をはたしたのであった。

ところで、「勞工神聖」の「勞工」の語が、「労働」と「労働するもの」の両義をふくむものであることは、言うまでもない。いまの中国語なら、日本語の労働にあたるものは「労働」である。「労働」の語は古く《莊子》や《後漢書》などにもみえるものであるが、それら古典の用例はいずれも、身体をうごかし、はたらく、という意味のものである。この意味での労働はまちがいなく人類史を通じて存在したものだ、近代にいたり社会とむすびつけた意味での労働の概念が形成される。社会を維持し発展させる基礎としての労働、資本にたいする労働等々。（したがって労働なるニンベン付きの語は本文章ではこの意味でもちいられるべきであるが、ときにより広くはたらくこと一般の意味でもちいられることもあることをお断わりしておく。）ところで、社会という概念が中国（東アジア）にはなかった（より正確には、当時の人には、なかった、と受け取られた）のだから、それを媒介にした労働の概念がまったく新しいものと意識されるものであったことは当然である。おそらくlabourの訳語に苦しんだ日本人が、古典にみえる労働の語の原意を生かし、それに社会との関係を明白にしめすべく動の字にニンベンを附した「働」をもちいて「労働」なる新語をつくりあげたのであろう。（「働」は国字、伴直方《国字考》には「近き代の文字なるへし」という。「労働」の出現は《哲学字彙》等より推せば、明治中期か。）

「労働」なる新語が中国人にも使われるにいたったのはやはり清末民初のことである。1902年

の梁啓超の〈新民説〉では「工群問題」という語に「日本謂之労働問題或社会問題」との割注をほどこしている<sup>⑤</sup>。日本語に「労働」という新語があることに気づいていることはわかるが、それを使うにはいたっていない。ところが、その数年後、革命派の機関誌《民報》となると事情はちがってくる。そこには、労働、労働者、労働社会、労働者階級、といったことが何十何百と列ねられている。日本への留学生たちは新しい概念と新しい用語を躊躇なく用いたのである。たとえば、朱執信の〈ラサール伝〉<sup>⑥</sup>ではかれの有名な法廷弁論をひいて、「科学と労働者階級とは社会の両端に位置するものである。……予は実には科学と労働者とを結びつけるべく生命をけんとするものである。」といった具合に、科学・労働者・社会といった言葉を注釈なく自然につかっている。

かくして、労働の語は中国人にも用いられるにいたった。しかし、よく検討してみれば、《民報》でそれらの話がもちいられている文章は、朱執信の前掲文をはじめ、すべて欧米の事情を紹介叙述した文章なのである。

先をいそぐが、中国の労働問題を専門にとりあげる雑誌の登場には、やはり辛亥革命そしてロシア革命の勃発を待たねばならなかった。上海でアナキスト中心につくられた《労働》雑誌の登場がそれである。1918年3月の創刊だから、初めにあげた蔡の演説のほぼ半年前のことであった。同誌の発刊詞にあたる文章<sup>⑦</sup>では、その主旨として以下の7項目がかかげられている。

- ① 労働の尊重
- ② 労働主義の提唱
- ③ 正当の労働の維持、不正当の労働の排除
- ④ 労働者の道徳の涵養
- ⑤ 世界知識と普通学術の労働者への注入
- ⑥ 世界の労働者の行動の報道による社会問題の真相の解明
- ⑦ 我が国の労働者と世界の労働者とが一致しての社会問題の解決の促進

《労働》雑誌の当時の社会全般におよぼした影響力を過大評価してはならないが、時代思潮へのはたらきかけないし、蔡演説の先駆的な意味は、相当にみとめられてよい。以下に〈勞工神聖〉演説がいかなる精神的風土のうえになされたものであるかをみてみよう。

なお、《労働》雑誌はニンベンの「働」の字を誌名にもちいたことで有名なのだが、その後、「労働」と「労働」が混用されて<sup>⑧</sup>しだいに「労働」に統一されていく。蔡元培が「勞工」の語をもちいたのはこの混用の過渡期なのであった。もはや使いわける必要がないほどの段階に達したとき、日本の国字を用いるわずらわしさを排したものであろう。

### III

〈勞工神聖〉演説の衝撃力は、当時における最高の知識人・蔡元培の口から伝統的な観念をくつがえす斬新な思想が表出されたことにあった。

蔡元培（1868～1940）は、科擧制度のもとでは26歳で進士に合格し、最高の出世コースである翰林院に配属されるという輝かしい経歴をもつ。つまり伝統の旧学の根底を有することを十二分に認められた人物であったが、日清戦争・戊戌変法を経て旧体制下での栄達を放棄し、新しい学問をもとめてヨーロッパに留学した。辛亥革命後に帰国して革命政府の教育総長（文部大臣に相当）の任につき、新生の共和国の教育方針の策定につとめた。第二革命失敗後にふたたび渡欧、袁世凱の死後帰国して北京大学校長となり、周知のように新文化運動の推進に重要な役割をはたしたのである。

旧学をみかぎって新学をまなんだ蔡元培がこころざしたのは、西欧近代文明が実現したと考えられた普遍的価値の体系のなかに中国の文明を位置づけなおして改革をおこなうことであった。ひとつだけ例をあげよう。教育総長のときに公表した〈新教育にたいする意見〉<sup>⑨</sup>のなかの道徳の基本についての見方である。

フランス革命が掲げた自由・平等・親愛——道徳の要旨はこれにつきる。

孔子曰く：匹夫も志を奪う可からず。

孟子曰く：大丈夫たる者、富貴も淫すこと能わず、貧賤も移すこと能わず、威武も屈くこと能わず。

これが自由の意味である。古えはこれを義といった。

このようにして、自由の概念は儒教の‘義’と接合され、同様に、平等は‘恕’と、親愛は‘仁’と接合される。蔡にあってはあくまで西欧近代文明が主軸なのであるが、伝統文明にたいして、いわば糟粕をすてて精髓をとる式に対処したのであって、そうであればこそ清末から民国にかけての大過渡期を代表する知識人でありえたのである。のちの国民政府時代のことを附けくわえておくなら、中央研究院の院長となって中国アカデミー確立のために余人をもってしては代えることのできぬほどの大きな功績をのこしたのである。

さて、伝統的な観念についていうなら、どの文明圏にあっても前近代においては、労働が尊重されるということはなかったであろう。中国にあっては、労働にたいするもっとも重要な評価は、孟子の以下のごときテーゼである。

心を勞する者は人を治め、力を勞する者は人に治めらる。人に治めらるる者は人を食ひ、人を治むる者は人に食われるは、天下の通義なり。<sup>⑩</sup>

農業者流の並耕説（統治者も農耕に従事すべしとの主張）を駁したのもとして有名なこの一節は、

労働蔑視を直接に説いた文章ではないにしろ、肉体をうごかすものと知力をはたらかすものを截然と分かち、前者を社会的に低位に置くことによって、結果的には労働蔑視観念を正当化する經典の根拠となったのである。

労働がさげすむべきものであるならば、知識人たるもの、それに携わるわけにはいかない。かくして、中国にあっては‘人に食われる’ものであることを疑問の余地なく外見的に誇示するために、爪を切らぬ、という陋習がうまれた。かの陸九淵が夷狄の中華侵入にいきどおり、‘指の爪を剪去して弓馬を学んだ’とのエピソードが年譜に持筆されている<sup>⑪</sup>ことからすれば、すでに南宋のころにこの弊習が確立されていたことがわかる。もちろん‘儒将’の語がしめすように、王陽明や曾国藩のような武人としても一廉の人物がいなかったわけではない。しかし、実践躬行の実学を主張した顔元<sup>⑫</sup>の清代を通じての埋没の歴史が逆照射するように、知識人は労働とかかわりのない生活をすべきだとされていたのである。

纏足ほどではないにしても、数十センチものばした爪をみる（もちろん写真だが）と醜悪をとおりこして不気味の感にとられる。このようであれば、労働はおろか運動もままならぬのが当然で、実際に旧中国の知識人のおおくは健康とは縁のとおい肉体の保持者だったようである。

このような知識人のありかたが改革者の許容しえぬものであることは言うまでもないところで、かの梁啓超によっても‘四体勤めず、五穀を分かたざる’‘寄生虫’だと指弾されている<sup>⑬</sup>のである。唾棄すべきこの状況を克服すべく、心ある清末の知識人はさまざまな道を模索した。なかでもっとも多くの人びとの心をとらえたのが異民族王朝体制打倒にむかって献身する道であった。清朝がたおれたあとの新しい共和国が革命をこころざした人びとの期待とはまるでちがったものでしかないことが明らかになったとき、さらなる改革が追求されたのであるが、知識人の対労働観ということでは、みずから健康な身体をつくりだすこと、およびみずからの働きで生活すべしとすること、の二つの面で新しいうごきがおこってきた。

前者の代表例としては、毛沢東の〈体育の研究〉<sup>⑭</sup>をあげることができる。1917年のことである。そのなかで毛は、学生の運動ぎらいの一因として、むかしからの文を重んじて武を軽んじ、‘好い漢は兵士にならぬ’との諺語に象徴される‘長年の習慣’を指摘し、健康なる精神を宿らせるための健康なる肉体を確立することの重要性をとく。いまのわれわれから見れば、ほとんど常識的なことばかりを述べているかのようなようであるが、むしろそれがまったく新しいものとして世間にうけとめられたところに旧来の伝統的観念のありようを窺うことができるのである。

後者については、惲代英<sup>⑮</sup>をあげておこう。惲は寄生的な生活を排し、かれのいわゆる“職業神聖主義”“庸誦主義”にもとづく生計の確立をはかる。このばあいの働くことの内容は文章を書いて稿料を得ることだから、當為そのものは伝統的知識人にとってもっとも重要な仕事なの

だが、それを職業ととらえみずからの労働に立脚する生活を構想している点に、俾代英の新しさをみることができるのである。このような自分の考えを、俾は<生活の実現>との一文に綴って《労働》雑誌に投稿しているが、その文章は‘労働尊重’の主旨に合致しているとして該誌に掲載されたのであった。

ちなみに、梁啓超による旧知識人像の否定から辛亥革命をへての毛沢東や俾代英による内面変革への視座の移行は、あたかも《コントラ・ソシアル》の中国での受容の変遷<sup>⑩</sup>——すなわち専制否定の理論的武器から民国を担う人民の自治精神の確立のための書物への変遷——を思わせるものがある。

ことがらは、しだいに成熟しつつあった。しかし、職業神聖から勞工神聖までのあいだにはもう一段の飛躍が必要だったと思われる。その飛躍が、第二次の渡欧のさい華僑教育会を組織して在仏の参戦華工（約15万人にのぼった）に教育をほどこさんがため、華工と‘親密な接触’をはかったことにあったであろうと考える<sup>⑪</sup>のには異論はない。ただもうひとつ付けくわえるなら、蔡元培はフランスの教員工会をモデルに、自分たちを‘勞工’の一員に位置づけることも学びとっていたのであって、帰国後に‘教育工会’の組織を發起しているのである。

当時を代表する最高の知識人が確信をもって話した演説だったから、勞工神聖のスローガンが中国の象徴である天安門から全国の変革をこころざす知識人たちの胸にしみとおっていったのは、ことがらの自然だったのである。

#### IV

<勞工神聖>演説の半年後には五四運動がおこり、中国の近代はさらなる激動の時代に突入していった。五四を前後して勞工神聖の精神を帯した実践を企図する勤工儉学・工読互助・新村運動などがつぎつぎと各地におこってくる。<sup>⑫</sup> その状況に鼓舞された面もあってのことにちがいないが、蔡元培は1921年の訪米時の演説<sup>⑬</sup>で‘十年あるいは二十年後には全国の人民すべてを欧米文化に接せしめるようにできると思う、’と述べた。しかし、現実はその楽観的な予想をうらぎる。解決を要する問題は山積していたが、本文章の主題とかかわる一事、知識人と狭義の勞工の関係についてみておこう。上の演説から十年後のことだが、1930年夏、蔡は上海の労働大学の意義を論じた演説<sup>⑭</sup>でこういっている。

（工業・農業学校も）中国に移されてくると性質が変わってしまう。工農学校に進んで勉強する者はもっぱら書物にかじりつき、実際の仕事をしない。かれらは士〔知識人〕になってしまったのである。農民の子供がいったん学校へ入ると、家に帰って父兄を軽蔑する。工人の子供もおなじである。

知識人の方から歩みよってともに‘神聖’であるとした‘勞工’が、自分の知識人化とともに出身階級を裏切るというのである。労働大学の学生はもちろんそうであってはならないとされた。しかしその任務はおそらく過大にすぎたであろう。

新しい芽は生まれたが、育っていくにはまだまだほかの条件が必要だった、というべきであろう。

#### 注

- ① 《北京大学日刊》第260号（1918年11月27日）。この記録は不完全であるが、これに従うしかない。
- ② 《北京大学日刊》第265号（1918年12月6日）。演説会は11月28～30日に行われた。李の演説の月日は不詳。李と蔡の演説は《新青年》第5巻第5号に転載され、多大の影響力をもった。なお、《新青年》の同号には李のもう一つの有名な論文<Bolshevism的勝利>も載せられている。
- ③ 華林（林声？）<社会百話之一、勞工可貴>《民国日報》付刊《觉悟》1919.7.20）。ちなみに<社会百話之二>は<科学世界>である。義璋<討論怎樣過我們暑假的生活>（同上1920.6.17）。
- ④ 陳独秀<兩個工人的疑問>（《労働界》第1号 1920年8月15日）。陳が蔡元培のことを‘ある人’といったのは、労働者にとって北京大学校長の名前をあげる必要を認めなかったこととともに<勞工神聖>の語が一人あるまじりていたことも考えられてよい。難言<南昌労働界の近況>（《労働界》第18号 1920年12月12日）。
- ⑤ 梁啓超<新民説・第九節論自由>（《新民叢報》第7号、1902年5月8日）。その文章で梁啓超自身がつかっている労働にあたる語は、《孟子》の‘勞力’（後出）である。なお、‘群’とはsocietyにたいする敷衍の苦心の訳語で、‘工群’とは‘労働者・社会’の意である。
- ⑥ 朱執信<德意志社会革命家小傳・(2)拉薩爾>（《民報》第3号、1906年4月5日）。なお、労働等の用例については、小野川秀美編『民報索引』を参照のこと。
- ⑦ 労働<労働者言>（《労働》第1号、1918年3月20日）。
- ⑧ 誌名でいうなら、さきにあげた上海の《労働界》とならぶ1920年刊の労働三誌、北京の《労働音》、広州の《労働者》はともに‘働’の字を用いている。また、《夥友報》第2期（1921年6月10日）の<介紹刊物>欄に、‘（労働）長沙劳工会’とみえる。
- ⑨ 蔡元培<对于新教育之意見>（《民立報》1912年2月8日）。孔孟の語は、《論語》子

罕（吉川幸次郎・朝日古典選・上 296頁）、《孟子》滕文公下（金谷治・同・上 207頁）。

⑩ 《孟子》滕文公上（金谷・上 184頁）。

⑪ 聶良杞《陸象山先生年譜》（紹興24年甲戌 16歳条）。

⑫ 小野和子〈顔元の学問論〉（《東方学報》京都第41冊）を参照。顔元（1635～1704）は、清初の人

⑬ 梁啓超〈新民説・第14節論生利分利〉（《新民叢報》第20号、1902年11月14日）。なお、“四体不動、五穀不分”は荷篠丈人の孔子批判の語（《論語》微子、吉川・下 298頁）。

⑭ 二十八画生（毛沢東）〈体育之研究〉（《新青年》第3巻第2号、1917年4月1日）。体育そのものは、西洋の学校制度の導入とともに、しだいに教科としてとりこまれた（李沙〈留日学生与中国近代学校体育の興起〉、《中日関係史論集》1985年 齊々哈爾、また、郭栄生編《民国孔庸之先生洋熙年譜》1981年、台湾商務印書館 宣統二年条）。

なお、身体的肉体的鍛練と表裏する道德涵養の運動が民国初年にわきおこったことも注意されるべきであろう。蔡元培・宋教仁・李煜瀛らの社会改良会、劉師復の心社、汪兆銘らの進徳会等々。蔡は進徳会の会員であったが、北大学長となってからは、北京大学進徳会をつくって推進につとめたし、また、毛沢東の新民学会等、五四時期の新生社団は多かれ少なかれ、その傾向を有したものだ。

⑮ 中央檔案館等編《溥儀日記》（1981年 中共中央党校出版社）1917年5月17日、同25日の条。〈實現生活〉は《労働》第4号（1917年6月20日）。なお、小野信爾〈五四時期の理想主義〉（《東洋史研究》第38巻第2号）参照。

⑯ 狭間直樹〈ルソーと中国〉（《思想》第649号）、島田虔次・狭間直樹〈中国での兆民受容〉正・続（《中江兆民全集》岩波書店 月報2・18）。

⑰ 森時彦〈フランス勤工儉学運動小史・上〉（《東方学報》京都、第51冊 201頁）。参戦華工との接触をここで強調したからといって、それ以前の蔡の思想と行動とを軽視しようとするものでないことは、言うまでもない。その一端は、再婚の相手をつのるのにあたったの〈五項摺偶条件〉（周天度《蔡元培伝》1984年 人民出版社 9頁）にみえる徹底した男女平等思想にも反映されている。教育工会については《実社自由録》（1917年7月）〈紹介〉欄参照。

⑱ 日本の研究として、勤工儉学運動では注⑰所掲森論文がすぐれている。新村運動については、中山義弘〈五四時期における「新しき村」の試み〉（《北九州大学外国語学部紀要》第40号）がある。

⑲ 蔡元培〈東西文化結合——在華盛頓喬治城大学演説詞〉（高平叔編《蔡元培全集》第4

卷 1984年 中華書局 50頁）。

⑳ 蔡元培〈労働大学の意義及労働大学生の責任——江湾国立労働大学講演〉（孫常煒編《蔡元培先生全集》1968年 台湾商務印書館 844頁）。